設定の確認と保存

この章では、システム設定の保存方法について説明します。

- 設定の確認 （1 ページ）
- ファイルシステムの同期 （3 ページ）
- 設定の保存 （3 ページ）

設定の確認

いくつかのコマンドを使用して、機能、サービス、またはシステムの設定を確認できます。多くはその実装において階層型であり、構成ファイル内の一部または特定の行に固有のものもあります。

機能設定

多くの構成では、特定の機能を設定して確認する必要があります。例には、IP アドレスプールの設定が含まれています。次の例を使用して、リストされているコマンドを入力し、機能設定が適切であることを確認します。

IP アドレスプールの設定を表示するには、 **show ip pool** コマンドを入力します。このコマンドの出力は、次に示すサンプルのようになります。この例では、すべての IP プールが *isp1* コンテキストで設定されています。

```
context : isp1:
+-----Type:        (P) - Public        (R) - Private
|                  (S) - Static        (E) - Resource
|
|+----State:       (G) - Good          (D) - Pending Delete      (R)-Resizing
||
||++--Priority:    0..10 (Highest      (0) .. Lowest (10))
||||
||||+-Busyout:     (B) - Busyout configured
||||||
vvvvvv  Pool Name           Start Address  Mask/End Address Used      Avail
----- --------------------- -------------- ---------------  ----------------
PG00    ipsec               12.12.12.0       255.255.255.0   0         254
PG00    pool1               10.10.0.0        255.255.0.0     0         65534
SG00    vpnpool             192.168.1.250    92.168.1.254    0         5
```

```
Total Pool Count: 5
```

重要 システムの機能を設定するには、これらの機能専用の **show** コマンドを使用します。詳細については、『*Command Line Interface Reference*』の「*Exec Mode show Commands*」の章を参照してください。

サービス設定

次のコマンドを入力して、サービスの作成と適切な設定がされていることを確認します。

show *service_type service_name*

出力は、次に示す例のように、サービスパラメータの設定を簡潔にリストしたものです。この例では、*pgw* という名前の P-GW サービスが設定されています。

```
Service name                        : pgw1
Service-Id                                  : 1
Context                                     : test1
Status                                      : STARTED
Restart Counter                             : 8
EGTP Service                                : egtp1
LMA Service                                 : Not defined
Session-Delete-Delay Timer                  : Enabled
Session-Delete-Delay timeout                : 10000(msecs)
PLMN ID List                                : MCC: 100, MNC: 99
Newcall Policy                              : None
```

コンテキストの設定

show context name *name* コマンドを入力して、コンテキストが作成されており、正しく設定されていることを確認します。

出力にはアクティブなコンテキストが表示されます。ID は次に示す例と同様になります。この例では、*test1* というコンテキストが設定されています。

```
Context Name     ContextID          State
------------       ---------          -----
test1              2                  Active
```

システム設定

show configuration コマンドを入力して、設定ファイル全体が作成され、正しく設定されていることを確認します。

このコマンドは、上記で定義したコンテキストとサービス設定を含む設定全体を表示します。

設定エラーの検出

構成ファイルのエラーを特定するには、**show configuration errors** コマンドを入力します。

このコマンドは、設定内でされた検出されたエラーを表示します。たとえば、「service1」という名前のサービスを作成していて、設定の別の部分で「srv1」と入力すると、このエラーが表示されます。

設定の特定のセクションを指定するには、このコマンドを調整する必要があります。次の例に示すように、**section** キーワードを追加し、[help] メニューからセクションを選択します。

show configuration errors section ggsn-service

または

show configuration errors section aaa-config

設定にエラーが含まれていない場合は、次のような出力が表示されます。

```
##############################################################################
Displaying Global
AAA-configuration errors
##############################################################################
Total 0 error(s) in this section !
```

ファイルシステムの同期

冗長管理カードを搭載したシステムで構成または StarOS バージョンのブート順序が変更されるたびに、管理カード間でファイルシステムを同期する必要があります。これにより、管理カード間で変更が同一に維持されることが保証されます。

次の Exec モードコマンドを入力して、ローカルファイルシステムを同期します。

[local]host_name# **filesystem synchronize all**

filesystem コマンドは複数のキーワードをサポートしており、ファイルシステムの破損を確認および修復したり、ファイルシステムを特定のストレージデバイスと同期したりできます。詳細については、『*Command Line Interface Reference*』の「*Exec Mode Commands*」の章をご覧ください。

サービス機能カードのブートファイルの同期

すべてのサービス機能（SF）VPC-DI 非管理カードのブートファイルを同期するには、次の CLI 実行可能コマンドを使用します。

[local]host_name# system synchronize boot

これにより、ブートファイルでの変更が SF カード間で同一に維持されることが保証されます。

mh14 未満のバージョンから mh14 以降にバージョンをアップグレードする場合は、リロードする前にこのコマンドを実行してください。

設定の保存

次の手順では、Exec モードのルートプロンプトが表示されていることを前提としています。

```
[local]host_name#
```

現在の設定を保存するには、次のコマンドを入力します。

save configuration *url* **[obsolete-encryption | showsecrets | verbose] [-redundant] [-noconfirm]**

url は、構成ファイルを保存する場所を指定します。ローカルファイルまたはリモートファイルを参照する場合があります。

重要 次の URL フィールド（ディレクトリ、ファイル名、ユーザー名、パスワード、ホスト、またはポート番号）に文字列を入力する場合は、「/」（スラッシュ）、「:」（コロン）、または「@」（アットマーク）の文字を使用しないでください。

重要 **-redundant** キーワードは、両方の MIO/UMIO カードにインストールされているローカルデバイス（usb1 または usb2）に、構成ファイルを保存する場合にのみ適用されます。このコマンドは、ローカルファイルシステムを同期しません。アクティブな MIO/UMIO のローカルデバイスとの間で他のファイルやディレクトリを追加、変更、または削除した場合は、両方の MIO/UMIO でローカルファイルシステムを同期する必要があります（ファイルシステムの同期（3 ページ） を参照）。

重要 **obsolete-encryption** キーワードおよび **showsecrets** キーワードは、StarOS 19.2 以降の **save configuration** コマンドから削除されました。削除されたキーワードを含むスクリプトまたは設定を実行すると、警告メッセージが生成されます。

（注） このコマンドでは usb1 キーワードオプションおよび usb2 キーワードオプションを使用できますが、このオプションは、デバイスがハイパーバイザを介してサーバーに設定されている場合にのみ使用できます。これには、仮想コントローラの作成と使用可能なデバイスの指定が含まれます。

推奨手順は、VPC 設定を外部ネットワークデバイスに保存することです。

上記のコマンドの詳細については、『*Command Line Interface Reference*』の「*Exec Mode Commands*」の章を参照してください。

system.cfg という構成ファイルを、アクティブな MIO/UMIO 上のフラッシュメモリに、あらかじめ *cfgfiles* という名前で作成しておいたディレクトリに保存するには、次のコマンドを入力します。

save configuration /flash/cfgfiles/system.cfg

翻訳について
このドキュメントは、米国シスコ発行ドキュメントの参考和訳です。リンク情報につきましては、日本語版掲載時点で、英語版にアップデートがあり、リンク先のページが移動/変更されている場合がありますことをご了承ください。あくまでも参考和訳となりますので、正式な内容については米国サイトのドキュメントを参照ください。